

『さア皆はん何ふだす。御馳走をお取りやす盛ひまひよふか。』

『いえ〜。お手敷を掛けては恐れ入ます。モウ勝手に頂戴いたします。』

『まア宜しいがナ。何をお盛ひ申しまひよ、鯨の子でもどふでおます。』

『そんな物有れへんやろ。鯨の子て何や。』

『豆腐粕や。』

『あ、豆腐粕の鯨の子。』

『そんな事云ひな。』

『此の鯨の子は仰山喰べられまへん、あんまり喰べると眼が赤ふ成て、耳が長ふなる。』

『兎みたいに云ひな。紙屋の大將一酌飲じまへふか。』

『ハハ、。藤やん、六兵衛はんの云ふ事豪い面白いナ。一酌飲じまへふかなんて。お前も何とか云

ひいな。』

『そんなら飲じられまへふ。』

『お蠟燭やがな全で。喜伊さん貴方は何を往きまへふ。』

『イエどもぞ放といとくはなはれ。玉子の巻焼を頂戴いたします、之れを鳥渡摘み久太郎町一丁目。』

『オイ皆聴いたか、喜伊公でも彼んな意氣な洒落を云ひよるがな。摘み久太郎町一丁目。佳えナ。』

『俺いは博勞町一丁目。』

『そんな事何にもならへん。』

『この巻焼は色は宜しいが、大分押しが利き過ぎてまんな』

『巻焼に押しが利くちウのは可笑しいな。』

『それに鹽が強い……………バリ〜。』

『オイ。巻焼をバリ〜音さして喰ふ奴が有るかいな。』

『そうかて音がするのや依て仕様が無い。』

『そこは音さ〜ん様に、口の中でオネ〜遣て鵜呑にしいな。』

『ヤア豪い物貰ふたなア。嗜む事が出来へん。』

『鵜呑にしたら宜えねがナ。』

『口〜パイに成てるね。』

『何時までオネ〜さしてんね。早ふ喰べんか。』

『これがどふして早ふ喰べられるかいナ。エーイ。ウーン。』

『オイ何ふした〜。』

『ウーン……………』